

「マヤ文明」

1. 世界は「四大文明」だけではなかった：世界六大文明の「真の世界史」

(1) 日本社会において、マヤ文明は「神秘的な謎の文明」として誤解されている場合が多い。世界史の教科書において西洋人が侵略する前のアメリカ大陸の記述は、質量ともに極めて貧弱。

(2) アメリカ大陸では、100以上の栽培植物。世界の食文化革命(世界の食材の3/5は、アメリカ大陸原産：トウモロコシ、トマト、トウガラシ、ジャガイモ、サツマイモ、カボチャ、インゲンマメ、ゴム、タバコ、カカオ、バニラ、アボカド、ピーナッツ)。観葉植物：コスモス、ポインセチア、ダリア、マリーゴールド)。アメリカ大陸と旧大陸の古代文明を対等に位置付け、バランスの取れた「真の世界史」を学ぶ上で、マヤ文明の研究は重要(青山2007)。

(3) マヤ文明の特徴

①旧大陸世界と交流することなく、前600年頃から16世紀まで中米で独自に発展したモンゴロイド先住民の土着文明、②金属利器が実用化されず、石器を主要利器とした人類史上で最も洗練された「石器の都市文明」、③大型家畜や荷車を必要としなかった人力エネルギーの文明、④主に中小河川や湧水を利用した、非大河灌漑農業を基盤にした文明、⑤その一部が熱帯雨林の中で興隆した文明

(4) 世界の他の古代文明と比較しうる類似点

①都市、②初期国家、③文字(4万~5万のマヤ文字、王朝史、算術、ゼロの概念、暦、天文学)、④神聖王、⑤農業を基盤とした生業、⑥戦争、⑦政略結婚、⑧その一部が王陵である神殿ピラミッドなどの巨大な記念碑的建造物、⑨洗練された美術様式、⑩貧富・地位の差異

(5) マヤ文明の人類史的な位置付け：石器が主要利器であったことは、マヤ文明が、旧大陸の「四大文明」よりも「遅れていた」ことを必ずしも意味しない。マヤ文明は、人類史上で最も洗練された「究極の石器の都市文明」(青山2005)。

(6) マヤ文明を学ぶ今日的意義：①異文化理解、②我々人類の「真の世界史」：脱「四大文明」史観、文明とは何か、人類とは何か、③人類学の文化変化理論：数百年、数千年の文明の盛衰、④現代地球世界の諸問題解決のささやかな糸口(都市化と環境破壊、人口増加と食糧難/水不足、戦争)

2. ホンジュラスのユネスコ世界遺産コパン遺跡とラ・エントラダ地域の調査(1986~1995年)：古代マヤ国家、都市性、交換、手工業生産の研究

①コパン近隣のラ・エントラダ考古学プロジェクトは、日本人チームによる初の中米考古学調査(国際協力)。第1期調査では、635遺跡を登録・調査(1989年に完了)。ラ・エントラダ考古学博物館の開館(1987年)。

②第2期調査では、最大のエル・プエンテ遺跡の発掘・修復・遺跡公園化(1990~1993年)。

③手工業生産を研究するにあたり、267点の複製石器の体系的な使用実験を行った。マヤ考古学ではまだあまり広範には行われていない高倍率の金属顕微鏡を用いた分析法で石器の使用痕を研究。

④博士論文執筆のための調査の一環として、マヤ考古学では従来軽視されてきた石器の研究を通じて世界遺産コパン遺跡と近隣地域での古代マヤ国家の形成・発展過程における交換及び手工業生産の性格と役割について実証的に研究。

⑤面の考古学調査。コパン谷や近隣の中小遺跡といった広範な地域のさまざまな地点の発掘調査で出土した91,916点の打製石器を分析。マヤ考古学で最大の石器データベースの一つ。年代は前1400~後1100年にわたり、2500年という長期間の政治経済組織を通時的に研究。

⑥主に実用品であったイシュテペケ産黒曜石の石刃核の獲得・地域内交換の統御は、その他の要因と相互に作用して、コパン国家(コパン王朝：後426~820年)を発展させ維持する上で大きな役割を果たした。古代マヤ国家の政治経済組織の復元は容易な作業ではないが、コパン国家は、少なく

とも一部の実用品の交換を集権的に統御していた。

⑦コパン都市中心部では黒曜石製石刃のような実用品、石槍のような武器、さらに海の貝製装飾品のような奢侈品が半専業で生産された。つまりコパンでは、政治活動や宗教儀礼だけでなく、経済活動もかなり集中していた。

4. 「マヤ低地のポンペイ」アグアテカ遺跡(グアテマラ)：古代マヤ人の日常生活と政治経済組織の研究(1998~2007年)

①古代マヤ人の日常生活の様子については、まだよくわかっていないことが多い。

②アグアテカ考古学プロジェクトの一大目的：アグアテカ遺跡と周辺遺跡の発掘調査で出土した全遺物の分析を体系的に行い、古代マヤ人の日常生活の様子や政治経済組織を研究。米国科学財団(研究代表者：猪俣健)、科学研究費補助金と三菱財団(研究代表者：青山和夫)他の研究助成を受けて、団長の猪俣健(アリゾナ大学)、グアテマラ、アメリカ、カナダ、スイス、ドイツ、ポーランドの調査団員と一緒に、共同調査団長として調査に従事。

③「マヤ低地のポンペイ」グアテマラのアグアテカ遺跡：高さ90mの断崖絶壁の上にあり、幾重もの長大な防御壁に囲まれ、8世紀に栄えたマヤ文明の要塞都市。

④発掘調査によって、810年頃の戦争で、都市中心部が敵の攻撃により広範囲にわたり焼かれ、短時間に放棄されたことがわかった。住居跡から出土した豊富で保存状態が良好な遺物は、古代マヤ支配層の生活の「最後のとき」にかんする、タイム・マシンの役割を果たす。

⑤アグアテカと周辺遺跡から出土した31,326点の石器を分析。

⑥書記を含む支配層が、主に実用品であった黒曜石製石刃を半専業的に生産。

⑦書記を含む支配層や農民が、主に実用品の地元産チャート製石器を半専業的に生産。

⑧アグアテカ地域における9世紀初頭の戦争は、主に支配層間の争いであった。王と支配層書記を兼ねる工芸家は、戦士でもあった。

⑨発掘された全ての支配層住居跡から、美術品および実用品の半専業生産の証拠が見つかり、王家の人々および高い地位の宮廷人を含むアグアテカの支配層の間で、手工業生産が広く行われていたことが明らかになった。男性の支配層書記は、石碑の彫刻や、貝・骨製装飾品や王権の宝器のような美術品の製作を行った。

⑩支配層の女性も、調理だけでなく、美術品や工芸品の生産の一翼を担った。

⑪古代マヤ支配層は、異なった状況や必要性に柔軟に対応して複数の社会的役割(書記、工芸家、戦士、天文観測、暦の計算、他の行政宗教な業務)を果たした。

5. セイバル遺跡(グアテマラ)の調査：マヤ文明の政治経済組織の通時的研究(2005年~)

①ハーバード大学の調査(1964~1968年)の後、約40年ぶりに調査を開始。

②王宮の発掘調査によって、王宮の壁面を装飾した漆喰彫刻が出土。

③セイバル遺跡で最大の神殿ピラミッドの前の層位的発掘調査を2005年に開始。セイバルの初期(前1000~前400年)の建設活動は、従来考えられていたよりも盛んであった。

④大都市セイバル遺跡は、前1000~後1000年の約2000年にわたる政治経済組織の通時的研究、すなわち、マヤ文明の起源、王権や都市の盛衰などの研究に理想的な遺跡。

参考文献

青山和夫 2005『古代マヤ 石器の都市文明』京都大学学術出版会。

青山和夫 2007『古代メソアメリカ文明—マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。

青山和夫・猪俣健 1997『メソアメリカの考古学』同成社。

サブプロフ、ジェレミー 1998『新しい考古学と古代マヤ文明』青山和夫訳、新評論。

関雄二・青山和夫 2005『岩波 アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店。

「マヤ」の俗説 我慢ならぬ

学術振興会賞の青山・茨城大教授

古代マヤ人の生活と政治に関する研究で、先月、日本学術振興会賞を受賞した青山和夫・茨城大教授(45)は、世界でふしがない石器の使用痕分析を専門とするマヤ考古学者だ。独特の神殿とピラミッドなどを築いたマヤ文明の実像を、石器の分析によって解明した。

中米に栄えたマヤ文明は紀元前600年ごろに起源を持つ「石器の都市文明」だ。青山教授は、数あるマヤの都市国家の中で、遺物の残りが多く「マヤ低地のポポカイ」とも称されるグアテマラのグアテマカ遺跡(紀元後400年ごろ〜800年ごろ)を2006年まで1年かけて調査した。

出土した約3万点の石器のうち、747点の使用痕を高倍率の金属顕微鏡で分析。その結果、王族や貴族などの支配者層が住むそれぞれの部屋で、石碑の彫刻や、貝・骨製の装飾品、織物などの製作が行われてい

たことが判明した。支配者たちは自らの手で、これらの美術・工芸品を作っていたのである。

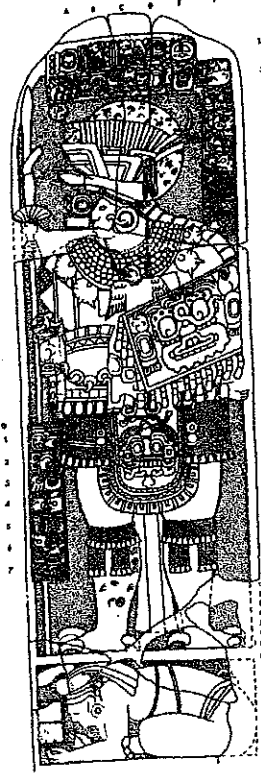
「人口の1%ほどしかいないマヤの支配者層は政治や戦争だけでなく、天文観測から手工芸まであらゆる知識と技術を専有することで、自分たちの神聖性を高めていたとみられます」

エジプトや中国など旧大陸の文明では支配者層が配下に工人や学者などの技術・知識集団を抱えていたが、それは全く異なる価値観がマヤ文明に存在していたことになる。

高度な天文知識や歴代の王の詳細な事跡を記録したマヤ文字は、神殿の周辺や土器などに大量に見られ、解読されてきたが、いまだ法文は見つかっていない。マヤとしての文字は、広く伝達するための道具ではなく、権者だけに限られた秘技の一つだったのだろうか。

近年の研究成果で、古代マヤの実像がかなり明らかになっているが、依然として、日本人の「一般的な理解とは大きな隔たりがある。世界的なマヤ研究の最前線に立つ青山教授は、「神秘と謎のマヤ文明」という古いイメージを修正しようと奮闘中だ。

特に「マヤは突然消えた」という俗説には我慢ならない。現在、メキシコ、グアテマラ、ベリーズなどの中米諸国に住むマヤ系住民は800万人を超える。西洋文化を受け入れながらも、独自の宗教観や風俗などを守っているからだ。「マヤは現在進行形で生きている文化です」と訴えている。(岡本公樹)

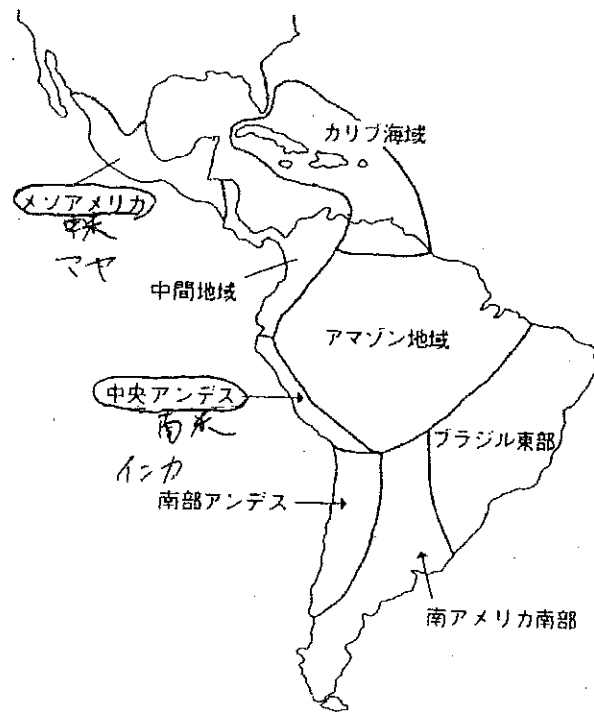


アグアテカの「石碑2」(735年)

捕虜のセイバル王の上に立つアグアテカ3代目王 (Graham 1967:図5)



マヤ地域の主要遺跡 (青山和夫 2005『古代マヤ 石器の都市文明』 京都大学学術出版会)



1492年のアメリカ大陸 (国本・中川 1997)

歴史

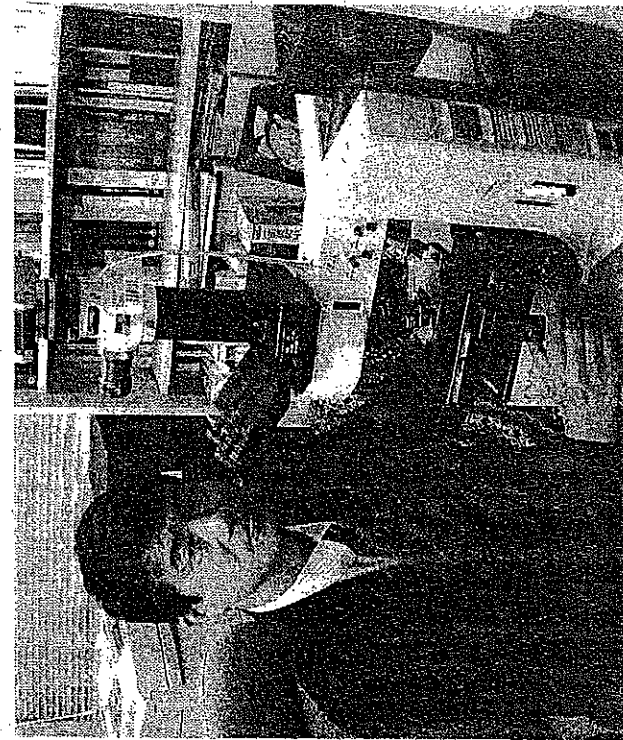
新書

叢書

歴史

2008年(平成20年)1月18日(金曜日)

CULTURE



高倍率の金属顕微鏡を操る青山教授

歴史